

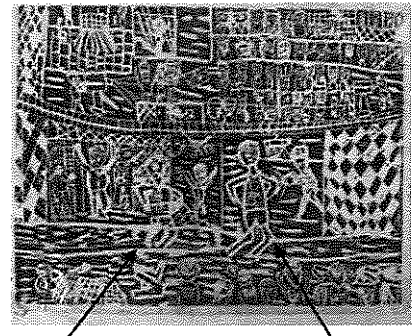
あつた第32回オリンピック競技大会（以下、「東京2020オリンピック」）は、2021年（令和3）8月8日に閉幕しました。アスリートによる国の名譽と自身の栄光をかけた白熱の戦いは多くの国民に感動を与えましたが、この間、新型コロナウイルス感染症の陽性者は増え続けました。オリンピックを本当にやつて良かったのか。その評価は後世がすることでしょうが、復興五輪とは言い難く、また、人類が新型コロナウイルス感染症に打ち勝ち、世界中がその絆を強めた証となつたとも言え切れません。そんな中でも、私は、数々の高鳴る感動を覚え、「平和の祭典」が困難を克服して日本で開催できたことを本当に良かったと素直に思うのです。そしてそこに、私は、私なりの、もう一つの東京2020オリンピックを見つけたのです。

男子マラソン。今大会限りでの引退を表明してレースに臨んだ大迫傑選手はレース序盤から力強い走りで見頭グループについていきました。30^キ過ぎで、非公認ながら人類で初めて2時間を切つた世界最速記録者、二大会連続金メダルを目指すケニアのキプチョゲ選手が前に出て独走します。集団はばらけ、大迫選手は8位で前を追う展開になります。36^キ付近で前の二人を追い抜き順位を6位に上げ、日本人選手トップの2時間10分41秒でゴールしました。金メダルのキプチョゲ選手とは2分3秒差、銅メダルの選手とは41秒差でした。勤務経験のある札幌は、その地にしては暑い夏でした。暑い、しかも高速のマラソン時代に日本人ランナーとして6位入賞を果たした大迫選手の魂の走りに、多くの国民は感染症で閉塞感漂う現実には何か前向きな気持を感じたのではないのでしょうか。1964年（昭和39）10月21日、あの日の東京国立競技場でも日の丸を背負い力を振り絞つた走りに国民は沸きに沸いていました。エチオピアのアベベ選手が競技場に現れてから約4分後、2位で入つてきたのは、福島県出身の円谷選手でしたが後ろにはイギリスのヒートリー選手が迫り追い抜こうとしています。ついにヒートリー選手はゴール手前約200^メで円谷選手を追い抜き2位でゴールします。左の絵は版画です。当時小学3年生の私が彫つて刷つたもので、コンクールで特選を頂きました。前を走っている

私のもう一つの 東京2020オリンピック

田原 昭彦 陸自78

のが円谷選手です。ゼッケンは77ですが何故か逆さになっていきます(笑)。日本を応援したい子供からでしょうか、ヒートリー選手の方が背は高いのですが円谷選手の方が大きくなっています(笑)。



ヒートリー選手 円谷選手

高度成長の時代、1964年東京オリンピック(第18回オリンピック競技大会)では戦後復興と平和な日本を体現し、そして、国家の威信を高めることは、選手の意志に関わりなく求められたのではないのでしょうか。まじめな人柄、ましてや自衛官である円谷選手の肩にのしかかったものは推し量れないものだったのでしよう。国家・国民が勇気を費った4年後、銅メダリストの円谷選手は自らの命(1940年(68年)を絶

ちます。久留米市前川原にある陸上自衛隊幹部候補生学校には、1955年(昭和30)から続く伝統の高良山登山走があります。標高312.1mの高良山のふもとにある高良大社三の鳥居前のゴールまで、学校から標高差156m、5・6kmを一気に駆け上がりまます。その最高タイムは、円谷候補生の記録、18分9秒(1966年)で、今もその記録は破られていません。この様な登山走は、海・空自衛隊の各種学校にもあると思えます。陸上自衛隊の幹部候補生は、男子では30分以内、女子では35分30秒以内が基準と聞きますが、これに到達しなければ、在校中に再挑戦することになります。

あの銅メダリストが走った高良山を12年後の1978年(昭和53)、私は、何も背負うものがないのに26分近くもかかって走ることになりましたが、版画に描いた円谷選手と同じ自衛官としての険しい山道をその後走り続けることになりました。

男子走り高跳び。二つの金メダル。決勝を戦ったカタルのバルシム選手とイタリアのタンペリ選手が大会側と協議の上、そろって金メダルに輝きました。両選手とも2m39cmを

ともに失敗しましたが、2m37cmまで一度も失敗がなくなつたく同じ成績で並んでいました。大会側は決着まで一回ずつ跳躍する「ジャンプオフ」を提案しましたが、バルシム選手が「金メダルを二つ貰えないか」と提案し、大会側がこれを受け入れたのでした。同じ種目でメダルを分け合う出来事で忘れられないことがあります。1936年(昭和11)ベルリンオリンピックの棒高跳び決勝です。この時、日本の西田修平選手と大江季雄選手の記録は共に4m35cmでしたが、体力は限界に近く、審判との話し合いの結果、競技は打ち切られました。ルール上は共に2位になるはずでしたが、発表された順位は西田選手が2位で大江選手が3位でした。決定された理由は定かではなかったようですが、納得できなかった西田選手は表彰台では銀メダルを大江選手に譲り、自らは銅メダルを掛けました。帰国後二人は話し合い、銀メダルと銅メダルを半分ずつにして一つのメダルにしました。このメダルは「友情のメダル」と呼ばれています。この時の大江選手は次回開催予定の1940年(昭和15)東京オリンピックの期待の星で

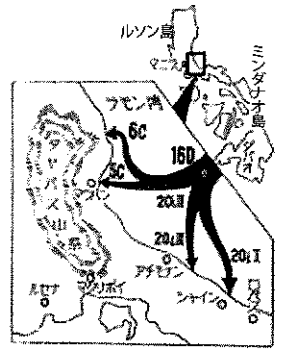
したが、東京オリンピックは日中戦争のため開かれることはありませんでした。その後の大江選手に待ち構えていたのは、戦争という高い、高い壁でした。1939年(昭和14)、陸軍に召集された大江選手は、歩兵第20聯隊第5中隊の少尉に進みます。当時この聯隊は、京都府福知山市に駐屯しており、現在、そこには陸上自衛隊第7普通科連隊が駐屯しています。1978年(昭和53)9月、幹部候補生学校を卒業した私は、普通科職種(の指定を受け、隊付き教育を受けるために第7普通科連隊に赴任し、半年後には3等陸尉に任官します。ある時、中隊長から旧陸軍歩兵第20聯隊史を題材にした隊員への精神教育を命ぜられ、連隊資料館に向かいます。そこで、連隊広報の准尉から『防人の詩』(京都新聞社)という本を頂き、読みふけり、大江選手・大江少尉と出会います。本の



裏表紙の内側には、本を読み終えたのは1978年(昭和53)12月15日との記載がありました。

それから遡ること37年前の1941年(昭和16)12月、日米開戦の初め、遙か南方ルソン島ラモン湾の北岸マウンバンに向かつていた日本陸軍歩兵第20聯隊第2大隊は、上陸直後予想を越える抵抗に遭い甚大な被害を受けました。このマウンバン正面海岸へ大江少尉でした。上陸作戦は1941年12月27日の未明、暗闇を利用して行われましたが、大江少尉の所属する第5中隊はマウンバンの敵陣地の正面に上陸し、そこに陣地防御している米比連合軍から猛烈な火力を受けることになりました。

このため上陸用舟艇から飛び降り、海辺にせまるまでの海中にいた第5中隊の180名の多くは波間に倒れ、ようやく砂浜に這い上がった者も砂丘上に倒れました。いや倒れていたというよりもなぎ倒されていた。180名の中隊は、戦闘に耐える将兵が20余名という壊滅的な被害を出すことになります。この中にあのメダリストがいたのです。第5中隊の先陣となった大江少尉



※図：引用『防人の詩』

は、舟艇から真つ先に飛び降りた海中を砂丘に向けて進んでいきましたが腹部を銃弾が貫通します。それでも傷つく部下の後送を指示し、自らも収容されましたが顔面からは血の気が失せ、福知山の町を歩く女学生が思わず頬を染めたあの端正なマスクは白色に近い状態となっていたそうです。処置を受けるために収容された輸送船には、運命なのか実兄の大江泰臣軍医中尉がいました。上官の軍医から直ちに手術を命ぜられた大江軍医中尉はこれを拒否したそうです。それは強い意志の表示ではなく、えん曲な拒否であったといわれます。上官も大江中尉も全てが手遅れであることを暗黙のうちに了解していたからでした。大江少尉の腹部は、大腸がはみ出し、その腸壁にはラモン湾の砂丘の砂が付着したままであったといえます。

この旧陸軍第20聯隊史を題材にした精神教育の中で、私は、戦争の悲惨さと戦争で亡くなられた方々の犠牲の上に今の平和があり、その平和の尊さを陸士、陸曹に語りかけたのだと思います。その後、私は平和を噛みしめながら、幹部自衛官としての道を34年余り歩み続けることになりました。

その後のあの「友情のメダル」、西田選手のメダルは和歌山・紀三井寺陸上競技場を経て母校・早稲田大学スポーツ博物館に、大江選手のメダルは秩父宮記念スポーツ博物館にそれぞれ収蔵されていると聞きます。

東京2020大会オリンピック・パラリンピックのビジョンには3つの基本コンセプトが掲げられています。「全員が自己ベスト」、「未来への継承」と並んで示されていたのが「多様性と調和」です。これは、人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障害の有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩するのであり、東京2020大会には世界中の人々が「多様性と調和」の重要性を改めて認識し、共生社会をはぐくむ契機となるような大会とす

る、という想いが込められています。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の一連の問題で、私も改めて認識し直さなければならぬこともありましたが、「多様性と調和」が実現できれば、世界に紛争は無くなり、誰もが幸せに暮らせると思います。しかし現実には、まだまだほど遠い世界でしょう。「多様性と調和」についての重要性和共に

「平和の祭典」であるこの東京2020オリンピックの間に、改めて国家防衛の任に就いた私自身の原点の一端を見つけることができました。それは、私のもう一つの東京2020オリンピックといえるものであり、そこには、田谷幸吉と大江季雄という二人のオリンピック、メダリストがいたのでした。

終わりにりましたが、大会期間の終始を通じて、極めて暑い中にもかかわらず、防衛省東京2020オリンピック・パラリンピック支援団の陸・海・空自衛隊員による凜とした活動に誇りを感じると共に国民の一人として、自衛官OBの一人として、心から感謝を申し上げたいと思います。